ブラックジャック×対魔忍

内府

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラックジャック「箱化だと？」

目　次

カルテ：３０８５　四角い女 ―――――――― 1
ブラックジャック　カルテ３０８６：豚との子供 ―――――――― 12

カルテ：３０８５　四角い女

ーブラックジャック邸ー

留守電「先生、以前先生に助けていただいた井河です。井河アサギです。実はまた、先生のお力をお借りしたいのです。当校の教師八津紫が箱になってしまったのです。電話ではなにをいっているのか分からないと思うので、どうかこちらまでいらして下さい。」

ブラックジャック「箱化だと？」

ーG県五車町ー

タクシー運転手「お客さん、どちらまで？」

ブラックジャック「五車学園。」

タクシー運転手「あいよ。」

ブラックジャック「……。」

タクシー運転手「あ～、お客さん前にも乗っけやせんでした？」

ブラックジャック「……さあな。」

タクシー運転手「いやあ、五車学園までの客乗っけるなんざ滅多にありやせんから、あっしは覚えておりやすよ。へえ。お客さん、五車学園にはお仕事で？」

ブラックジャック「ああ。」

タクシー運転手「どんなお仕事をされるんで？」

ブラックジャック「…守秘義務だ。」

タクシー運転手「あっそれは失礼しやした。ただ、あっしには分かりやしたぜ、お客さん政府のスパイなんでしょ。いやっなに、安心してくだせい。こう見えてもあっしは口が固いんで、へえ。」

ブラックジャック「……。」

タクシー運転手「おっ、着きやすしたぜ。五車学園でさあ。」

ブラックジャック「世話になったな。」

タクシー運転手「またのご利用、おまちしておりやす。」

ー五車学園学園長室ー

アサギ「お待ちしていました。ブラックジャック先生。先生のおかげで私も妹のサクラも助かりました。本当にありがとうございました。」
ブラックジャック「いや、あなたが治したいと思ってそれの手助けをしただけです。それで、患者は？」
アサギ「こちらをご覧下さい。」

ー学園長室のモニターー
白い殺風景な部屋とその中央に箱とそこから突き出した人間の顔があった。
いや、箱に見えたのは人間の胴体であった。
肉体が直角に曲げられて直方体にされていた。

ー学園長室ー
ブラックジャック「…これは！」
アサギ「八津紫です。ご覧の通り箱になってしまいました。」
ブラックジャック「一体、どうしてこんなことに？」
アサギ「魔科医、桐生佐馬斗のせいです。彼は腕の立つ外科医ですが人体改造も行っていました。そして紫をストーカーして、ついに紫を拉致しました。私達が東京キングダムで桐生の拠点を襲撃した際にはもぬけの殻で箱になった紫しかいませんでした。」
ブラックジャック「そうですか、彼女のカルテを見せてください。」
アサギ「分かりました。種田、先生に紫のカルテを。」
種田「かしこまりました、先生こちらをどうぞ。」
ブラックジャック「どうも。」
アサギ「こちらの種田は、当校の校医をしております。診察も彼が行いました。」
種田「種田三郎でございます。以後お見知りおきを。」

―八津紫のカルテー
彼女のカルテにはＸ線、ＭＲＩの画像も添付されていたがその画像

は人間の形ではなくまさしく箱であった。
紫の骨格から作り変えられており、骨を削るかあるいは人工のものに取り替えられていた。
また、より箱型に近づけるために直方体の辺の部分にはセラミック製のフレームが付けられていた。
ＭＲＩの断面画像から彼女の血管は手術により癒着している部分が離されないように繋げられ、無理に剥がそうとすると大出血を引き起こすトラップのようになっていた。
しかし、これだけの改造をしながらも生命活動にはなんら支障がなかった。
ブラックジャックはこの手術を行ったヨーゼフ・メンゲレの発想と、人体の構造を熟知した外科医としての知識と技術に底知れない恐怖と嫌悪感を感じた。
―学園長室―
ブラックジャック「これほどとは…」
種田「ええ、私も診察をして驚きました。私の知り合いの医者にこのカルテを見せると皆匙を投げました。」
アサギ「もうこうなっては先生におすがりするしかありません。報酬は現金で８５００万円をご用意しました。どうかお引き受け下さい。」
ブラックジャック「分かりました、お引き受けいたしましょう。」
アサギ「あぁ、本当ですか。ありがとうございます。今回も校内に先生のお部屋をご用意いたしました。ご自由にお使いください。」
ブラックジャック「そうさせて、いただこう。早速だが患者の所に案内してもらおうか。」
アサギ「分かりました。種田、先生をご案内して差し上げて。」
種田「かしこまりました。」
―五車学園内医療施設―
ブラックジャック「キリコ！なぜお前がここにいる！」
キリコ「決まっているでしょう。依頼があったんですよ。」

ブラックジャック「おい、どういうことだ？彼女を助けるんじゃなかったのか？」
種田「いえ、わたくし共はキリコ先生には依頼しておりません。紫さん本人のご希望です。これ以上こんな姿は見せられないとのことです。」
キリコ「そういうわけで私は正式な依頼でここにいるんですよ。」
ブラックジャック「ふざけるな！誰がお前なんかに患者を殺させるものか。必ず彼女を救ってみせる！」
キリコ「せいぜい頑張ってください。私も助かる命なら助かったほうがいい。」
ブラックジャック「なんだと？」
キリコ「私は元々軍医だったんですが、四肢のもげた兵士が苦痛から解放されたくて私に殺してくれと頼むんですよ。医者として助けたかったんですが助かる見込みのない彼らをいたずらに苦しめたくなかった。そんなわけで安楽死を始めたんですが、医者として助かる見込みのある患者を死なせたくはありません。」
ブラックジャック「・・・・。」
キリコ「分かってくれとは言いません。では私はこれで。」

―独房前―
種田「こちらが、彼女のいる独房です。」
ブラックジャック「分かりました、開けてください。」
種田「はい。」
―独房内―
紫「・・・・だれ？」
ブラックジャック「私だ、ブラックジャックだ。」
紫「だめ！こないで！」
ブラックジャック「安心して、君を助けにきた。」
紫「いや！先生にこんな姿見られたくない！」
ブラックジャック「落ち着いて、私が治してみせる。」
紫「うそ！どの先生も匙をなげたわ！」

ブラックジャック「うそじゃない、私には君を治せる。」
紫「・・・・、本当ですか？」
ブラックジャック「ああ、本当だ。だから死のうとするな、最後まで希望を持て。」
紫「・・・分かりました先生を信じます。」

ー独房前ー
種田「先生、本当にできるんですか？」
ブラックジャック「おそらく、大変困難な手術になるでしょう。だがやらずにこのまま紫さんを死なせるわけにはいかない。」
種田「分かりました、私も協力させていただきます。」
ブラックジャック「今日の所はもう休んで明日から手術の方法を決めていきましょう。」
―ブラックジャックの部屋ー
電話「ＰＲＲＲＲＰＲＲＲ」
ブラックジャック「・・・・・。」
電話「こちらはてんちゃい外科医ブラックジャックちぇんちぇいの第一ひちょ兼ちぇわ係ピノコれす。ちぇんちぇいにようあゆかたは用件を、ちぇんちぇいはいちゅ帰るか、どこにいゆか、なにをしてゆのかをお答えくだちゃい。」
ブラックジャック「あー、ピノコか？しばらく患者の所にいるからな。ちゃんと歯を磨いて留守番してろよ。」

―翌日、ミーティングルームー
種田「ブラックジャック先生、手術の方針はどうされますか？」
ブラックジャック「簡単です。くっついているとろを剥がし、おかしなところを入れ替え、異物を除き、元に戻す。それだけです。」
医療スタッフＡ「無茶だ！血管が複雑に絡み合って、通常の患者と体内が全く違うんですよ？一歩間違えれば患者が死んでしまう。」
ブラックジャック「無茶は承知だ。やるべきことが分かっているならあとはやるだけだ。」

医療スタッフＡ「不可能だ・・・。」
種田「私はブラックジャック先生を信じてみようと思います。全力で協力させていただきます。」
医療スタッフＢ「先生、技術的な話はともかく移植用の皮膚や骨はどうされるんですか？」
ブラックジャック「それについては私にあてがある。骨についてはすぐになんとかなるが、皮膚は待つ必要がある。」
医療スタッフＣ「待つ？」
ブラックジャック「ああ、いずれ分かる。本日のミーティングはこれにて終了とする。」
医療スタッフＡＢＣ「お疲れ様でした。」

―ブラックジャックの部屋―
電話「はい、こちら三日月病救済委員会。」
ブラックジャック「そちらのスタンリー大学教授のフォックス先生をお願いします。月子が世話になった間といえば分ります。」
電話「間様ですね、少々お待ちください・・・・・。お電話変わりました、フォックスです。お久しぶりですブラックジャック先生。」
ブラックジャック「ご無沙汰をしておりました。実はお願いがあって電話しました。」
電話「何なりと仰ってください。」
ブラックジャック「そちらで使用している人工骨をおゆずりしていただきたい。」
電話「なんですと！譲るも何もあれはブラックジャック先生が月子さんのような患者のために開発されたものではありませんか。いくらでも差し上げます。」
ブラックジャック「本当ですか、ありがとうございます。」
電話「なにお安いご用ですよ。」

―学園長室―
ブラックジャック「手術の方法とおおよその準備は終わりました。

あとはあることをまつだけです。」
アサギ「あること？」
ブラックジャック「ええ、一家心中です。移植に使っても誰も文句を言いませんから。」
アサギ「そんな・・・。先生、私の体を使ってください。」
ブラックジャック「無理です。移植は大きく皮膚を取るので一人だけでは負担が大きすぎます。」
アサギ「私は死んでも構いません。どうか、紫を救ってください。」
ブラックジャック「無理なものはむりです。」
サクラ、凛子、ユキカゼ「一人じゃなければいいんですね。」
アサギ「あなた達・・・。」
サクラ「むっちゃんを死なせるわけにはいかないっしょ。」
ゆきかぜ「学園長にだけかっこつけさせるわけにはいきませんから。」
凛子「ブラックジャック先生、これでもまだ駄目ですか？」
ブラックジャック「・・・・・手術は明日の夕がたから行う。４人ともそれまでに用意を済ませておけ。」
アサギ、サクラ、凛子、ゆきかぜ「はい！」
―独房内ー
ブラックジャック「明日、君の手術を行う。大きな手術なので醜い傷が残ってしまうかもしれない。ただ、君が目覚めたら今の箱型ではなくなる。いいね？」
紫「はい、先生にすべてお任せします。」

―翌日の夕刻手術室ー
ブラックジャック「これより、腹部の癒着部の剥離、異物除去、人工骨移植、皮膚移植及び全身骨格の再建術を行う」
種田、医療スタッフ「よろしくお願いします。」
ブラックジャック「メス」
・
・

・
ブラックジャック「汗」
医療スタッフA「凄い、なんて速さなんだ・・・」
・
・
・
ブラックジャック「電動ノコギリ」
医療スタッフB「速いだけでなくなんて集中力だ、もう7時間も経過しているのに最初と全く同じスピードだ。」
・
・
・
ブラックジャック「バイタル」
医療スタッフA「バイタル安定してます。」
医療スタッフC「そんなアプローチの仕方があるとは、どこまで人体の構造を熟知しているんだ」
・
・
・
ブラックジャック「ドナーから採取した皮膚をここへ。」
医療スタッフB「彼は神の腕をもっているのか。」
医療スタッフC「ああ、だがさすが種田さんだ。彼の執刀を完璧に補佐している。」
ブラックジャック「・・・・・。」
・
・
・
ブラックジャック「止血鉗子」
医療スタッフA「本当にやってのけるなんて信じられない。」
・
・

・
ブラックジャック「縫合終了。お疲れ様でした。」
種田、医療スタッフＡＢＣ「お疲れ様でした。」
医療スタッフＡ「この目で見ても信じられません。手術が成功するとは。」
医療スタッフＢ「この手術に参加できたことを誇りに思います。」
医療スタッフＣ［すばらしい技術です。どこで習ったんですか？］
ブラックジャック「少年チャンピオンのマンガからさ。」
種田「・・・・・。」
ブラックジャック「私は今から眠るが、移植した部分の感染症には最大限注意してくれ。」
医療スタッフＢ「分かりました。」

―???―
???「もしもし、警視庁組織対策犯罪部ですか？そちらの・・・・・。」

―紫の病室―
紫「すぅ・・すぅ・・。」
種田「・・・・・。」
種田「・・・・・。」
種田「・・・ッ痛！なんだ、メス？」
ブラックジャック「私の患者に手を出すのはやめてもらおうか。」
種田「何を言い出すんです？私はただ・・。」
ブラックジャック「しらばっくれるな、あんた箱化させた本人なんだろ？」
種田「何を根拠にそんなことを。」
ブラックジャック「あんたは私の手術に完璧についてこられた。こんなことできるのは箱化させた本人ぐらいだ。」
種田「それだけで決めつけられては・・・。」
ブラックジャック「まだある、知り合いの刑事に調べてもらったんだがあんたは失踪したことになっていた。こんなところでなにをし

ている？」
種田？「・・・・・・ふっ、ばれちゃあしょうがない。そうさ、俺が魔科医桐生佐馬斗だ。まさか、本当に手術を成功させるとはな。」
ブラックジャック「・・・・。」
桐生「悪いがこのまま帰らせてもらうぜ。一歩でも動くと先生を殺す。」

ブラックジャック「ああ、分かった、動かない。」

ブラックジャック「私はな。」
「忍法・殺陣華!!!」
桐生「ぐはあ!!」
アサギ「動くな桐生、おとなしくしろ！」
桐生「くっくそ！」
ブラックジャック「ありがとう、助かりました。」
アサギ「いえ、こちらこそ先生がお気づきにならなければこのまま逃がすところでした。」
ブラックジャック「あなたも皮膚を提供したばかりなので体には気を付けてください。」
アサギ「はい。こい、桐生！二度と外に出られると思うなよ！」
桐生「は、離せ。」

―一週間後、紫の病室―
ブラックジャック「よし、経過は良好ですね。」
紫「本当に信じられません。これが私の体なんですか？」
ブラックジャック「ええ、これが貴方本来の体です。」
紫「先生にはなんてお礼を言えばいいのか分かりません。」
ブラックジャック「お礼ならアサギさん達にも言ってあげてください。彼女達から皮膚や輸血をしてもらいましたから。」
紫「そうだったんですか・・。」（アサギ様の皮膚・・・私に移植さ

れたのか・・・つまり二人は一つになった!!）
ブラックジャック「紫さん？大丈夫ですか？」
紫「あっいえっなんでもありません！」
ブラックジャック「手術直後なので体調には気を付けてください。私はこれで帰ります。」
紫「ブラックジャック先生本当にありがとうございました。」

―ブラックジャック邸ー
ブラックジャック（んっ・・こんなところに段ボールが・・・なぜだろう、無性に入りたいぞ。）
ブラックジャック（よし、入った。今どんな感じなんだろう？おっ鏡があるぞ。こ、これは。）
ブラックジャック「おーいピノコ、これ捨ててくれ。」
ピノコ「はーい、ちぇんちぇい。」

ピノコ「ちぇんちぇいれんわ、れんわなってゆよー。」

次回予告
ゆきかぜ「先生・・・、助けて、私、私・・・オークの子供を妊娠しちゃった。」
ブラックジャック「オークの子供を妊娠しただと？」
カルテ：３０８６　～～豚の子供～～

ブラックジャック　カルテ３０８６：豚との子供

―ブラックジャック邸ー
電話「ｐｒｒｒ、ｐｒｒｒガチャ」
ブラックジャック「はい、こちらブラックジャック。」
電話「・・・・・。」
ブラックジャック「もしもし？」
電話「・・先生、助けて。・・私、私オークの子供を妊娠しちゃった。」
ブラックジャック「おい、あんたは誰なんだ？」
電話「……。ガチャン」
ブラックジャック「オークの子供を妊娠しただと？」
ピノコ「ちぇんちぇー、だえから？」
ブラックジャック「さあな、切れちまったよ。」
ピノコ「ふーん、あ！ごはんできたよー。」
ブラックジャック「そうか、飯にするか。」
ピノコ「さっ、どーじょ。」
ブラックジャック「いただきます……、ブー！」
ピノコ「どうちたの？」
ブラックジャック「ピノコ、お前さん味噌汁にまた、ソースを入れたな。」
ピノコ「アッチョンブリケ！」
ーＧ県五車学園園長室ー
アサギ「……。」
電話「ｐｒｒｒ、ｐｒｒｒ」
アサギ「……。」
電話「ｐｒｒｒガチャ、はい、ピノコれす。」
アサギ「もしもし、私はアサギと申します。そちらにブラックジャック先生はおられますか？」
電話「うーん、ちょっと待ってくだちゃい。ちぇんちぇー、れんわー。あしゃぎって女のひとー。」

アサギ「……。」
電話「はい、代わりました。ブラックジャックです。」
アサギ「先生、この前はありがとうございました。あの、当校の生徒のゆきかぜがそちらにうかがっていませんか？」
電話「いえ、来ていませんが。」
アサギ「そうですか…。」
電話「何かあったんですか？」
アサギ「…、ゆきかぜが失踪しました…。」
電話「なんですって？」
アサギ「彼女はある任務で東京キングダムに潜入していました。その際、彼女の正体が敵にばれて捕まってしまいました。そこで、なにをされたのかは分かりませんが私たちが彼女を解放した際彼女は白眼を剥いて気絶しオークの精液に体の外も中もまみれていました。」
電話「…。」
アサギ「学園で目を覚ました彼女は自分がされたことに絶望し、学園から姿を消してしまいました。」
電話「それは、お気の毒に…。」
アサギ「もしや、先生のお宅に行ったのではと思ったのですが…」
電話「実は今日、オークの子供を妊娠したという電話がありました。」
アサギ「なんですって？」
電話「名前を名乗らずすぐに切れてしまいました。」
アサギ「居場所は、居場所は言っていませんでしたか？」
電話「いえ、なにも。」
アサギ「そうですか…。」
電話「また、電話があればこちらからお伝えします。」
アサギ「はい、お願いいたします。」
電話「ではまた。」
電話「ガチャ」
サクラ「先生はなんて？」
アサギ「電話があったそうよ。ただ、すぐに切れたって。」

サクラ「そっか…手がかりなしか…」
アサギ「私たちで探すしかないわね。」
紫「学園長！大変です、凛子がいなくなりました！」
アサギ「なんですって！」
紫「部屋にこれが残されていました。」
アサギ「……ゆきかぜを探しに行きます……。」
サクラ「まあ、気持ちは分かるかな。」
アサギ「もう、勝手なことばっかりして！」
ーブラックジャック邸ー
ブラックジャック「……。」
ピノコ「ちぇんちぇい、れんわはなんらったの？」
ブラックジャック「いや、なんでもない。さっ、もう寝よう。」
ピノコ「はーい。」
ブラックジャック「……。」
ピノコ「ちぇんちぇい、おやちゅみなちゃい。」
ブラックジャック「……。」
ブラックジャック「……。」
ブラックジャック「くそっ！」
ピノコ「ろこへいくのよさ？ねえッろこいくの！ちぇんちぇい！」
ー車内ー
ブラックジャック「G県か…あの湖がちかいな…。」
ー土砂降りの山道ー
ゆきかぜ「…ごめんね…達郎…ごめんね…。」
ゆきかぜ「……。」
車「プッープー、プッープー」
ゆきかぜ「…なに？」
ブラックジャック「やっと見つけた。さあ、こっちにおいで。」
ゆきかぜ「ブラックジャック先生？…どうしてここへ？」
ブラックジャック「お前さん、この先の湖に用があるんだね。そうでしょう？」
ゆきかぜ「えっ？」

ブラックジャック「お前さん湖に身を投げてしぬつもりなんだ。」
ゆきかぜ「違います！違う！けっして！」
ブラックジャック「そこの湖は自殺の名所だっていうからね。」
ゆきかぜ「そうじゃありません！…そんなんじゃ…。」
ブラックジャック「五車学園から連絡があったよ。」
ゆきかぜ「……。」
ブラックジャック「アサギさんだいぶ心配してたな。」
ゆきかぜ「……。」
ブラックジャック「他の紫さん達も心配してるだろうな。」
ゆきかぜ「……。」
ブラックジャック「酷い目にあったのは分かる、死にたくもなるだろう。」
ゆきかぜ「……。」
ブラックジャック「だが、お前さんを心配してる人のことも考えたらどうだ？」
ゆきかぜ「……アサギ先生……、皆……。」
ブラックジャック「まあ、ゆっくり考えるこった。」
ゆきかぜ「……。」
ブラックジャック「…！くそっ！雨で崖が崩れてやがる。」
ゆきかぜ「…うっ、お、お腹が…」
ブラックジャック「どうした？」
ゆきかぜ「痛い、いたったた、お腹の、中でエアゞアゞアゞアゞアゞ」
ブラックジャック「すぐ上に山小屋がある。そこへ行こう。」
ゆきかぜ「うっうう……。」
ー山小屋ー
ブラックジャック「よし、さあここへ。」
ゆきかぜ「アッツツ、うゥ…。」
ブラックジャック「なんだ？急に腹が膨らみだしたぞ！」
ゆきかぜ「ウアアアアーーーー」
聴診器「ドックン、ドックン、ドックン」

ブラックジャック「腹から心音が聞こえる……本当に妊娠していたのか。」
ゆきかぜ「うう、何かが出てきそう……ぐああ、イタイっイタイ、やだっやめて！ウウーン、ウアアアア」
ブラックジャック「まさか陣痛か？もう、産まれるのか？」
ゆきかぜ「アッ…いっ…いた…い。」
ブラックジャック「お産は医局時代に立ち会っただけなんだがな、しょうがない。今度痛んだら思い切りきばれ、よしと言うまできばるんだぞ。」
ゆきかぜ「ハァハァ…はい…、うっうあーー。」
ブラックジャック「きばって！」
ゆきかぜ「ンンーーーー!!……ハァハァ」
ブラックジャック「きばって！」
ゆきかぜ「グアアッンン、ンンーー!!……アッ……い……い……いた。」
ブラックジャック「む…胎児が大きすぎるんだっ帝王切開しなきゃならん。」
屋外用無菌室「プクーーー」
……
ブラックジャック「よし、子宮に到達したぞ……ナム三！胎児が豚の頭をしている！……。」
ブラックジャック「……。」
……
ゆきかぜ「すぅ…すぅ…。」
ブラックジャック「フー、術式終了。よく寝ているな。」
山小屋の扉「コンコン」
ブラックジャック「誰だ？」
山小屋の扉「その声はブラックジャック先生ですか？私です、秋山凜子です。入ってもいいですか？」
ブラックジャック「ああ、入ってくれ。」
凜子「失礼します。…あっ！」

ブラックジャック「静かに、手術を終えて今は寝ている。」
凜子「そうでしたか…、それでゆきかぜは？」
ブラックジャック「無事だよ。」
凜子「ホッ、それはよかった。ところで腹の中にいたオークは？」
ブラックジャック「死んだよ。」
凜子「死んだ？……まさか先生が？」
ブラックジャック「医者はな、時には患者のためなら悪魔にもなることがあるんだぜ。」
凜子「……ありがとうございます、先生。ゆきかぜがこれで余計に苦しめられずにすみました。」
ゆきかぜ「…う、ううん……凜子…先輩？」
凜子「ゆきかぜ！この馬鹿！いきなり居なくなるなんて！」
ゆきかぜ「うっ…す、すみません…」
凜子「グスッ…どれだけ心配したと思ってる、グスッ……無事でよがっだ……。」
ゆきかぜ「うっうっ……凜子…スンッ……先輩…ウッウァワーーーン」
凜子「グスッ…さあ、五車学園に帰ろう。」
ゆきかぜ「うっグスッ……はい。」
凜子「ブラックジャック先生、ゆきかぜを助けていただきありがとうございました。後で必ず御礼をいたします。」
ブラックジャック「ああ、気をつけて帰りなさい。」
凜子「はい、ではこれで。」
ブラックジャック「……。」
ブラックジャック「これで一件落着か。今回はおまえは役に立たなかったが、こんな時もあるさ。」
小鳥の模型「……。」